

## 『挿注参釈広智禅師蒲室集』引用漢籍及び漢詩について

孫 容 成

足利学校史跡図書館に中蔵円月(一三〇〇)一三七五著の『挿注参釈広智禅師蒲室集』(以下『参釈』と略す)という書物が所蔵されていることは、『国書総目録』などによって知られている。それは五山版の『蒲室集』(六冊)詩文部分(第一冊巻一から巻四第二葉、及び第二冊と三冊の一部)の余白部分に、注を書き込んだものである。『蒲室集』とは元僧笑隱大訶の詩文集で、日本に伝わってから広く受容され、中世禅林文学に多大な影響を及ぼした。中蔵円月は日本で初めて『蒲室集』を講釈した人物で、彼の作ったこの『参釈』は、『蒲室集』の最初の注釈として知られている。しかし、その内容が膨大であることよってか、その具体的な内容についての検討は、皆無とわかっていいのである。そこで、本論文では特に同書にみえる引用漢籍と詩人について整理し、分析したい。いかなる書物や漢詩から用例を引用したか、その所拠するテキストは何か、また、その書物なり漢詩なりについての円月の理解がいかにどのものであったかを分析することは、その注釈者円月のみならず、十四世紀における日本知識人層の漢籍受容の実状を明らかにするのに有益、かつ重要なことであろう。

## 一 『参釈』の制作及び現存写本の来歴

引用漢籍について書く前に、『参釈』の制作経緯及び現存本の来歴について説明したい。

『参釈』の冒頭『蒲室集』目録第一巻に序が書かれている。この序によって、『参釈』の制作経緯などが分かるので、長文ではあるが、以下に引用する。

## 挿注参釈廣智禅師蒲室集序

等持春屋禅師刻蒲室集版、既成、俾予解之、蓋以欲啓彼童蒙者歟、抑又以予忝為法門之姪、故見命也、寧可以不才為解乎、凡古書故事巷談俗諺、如有可与本文相類者、輒引而證之、用細字挿之乃篇言辭之間為註、又別出管見以推考故事与本文之同異、取舍、或反而違之、或順而從之者、參而釈之、低書於章句之後稱釈、曰総而目之曰挿註参釈廣智禅師蒲室集、不敢出觀之大方、只可与初学兒輩、未解句逗者、略得進業之助尔、不覺紛擾如衣壞絮入荆棘中、適自纏絆矣、且夫蒲室師伯者、吾先師之所畏也、乃以其文廣流布於吾海東之國、責當在吾也、然而春屋刊行、其能可已、深感於斯、戊戌秋、日本國利根郡吉祥禅寺、姪圓月拜書

等持寺の春屋禅師は『蒲室集』を刊行し、それが完成すると、私に釈釈させた。童蒙を啓発させようとするのだろうか。そもそも、私が笑隱大訥の法姪ほりまに当たるために命じられたのである。どうして、無学をもって断ることができようか。そこで、古書の話や巷談俗諺で、本文と類似するものがあれば、引証し、小さい字でその篇の言葉の間に挿入して註とした。又、別に私見を出して、故事と本文の異同を推考し、取捨した。そして、それと同じ意味で使っているかどうかについて、釈釈を試み、章句の後に字を下げて記して釈とした。それらをまとめて『挿註参釈広智禅師蒲室集』と名づけた。識者にお見せするほどのものではなく、ただ初学者や句読も分からないような者の学業の助けとすべきである。知らず知らずのうちに煩雑になって、ぼろぼろの衣服を纏って荆棘の中に分け入ったようで、自ずから乱れてしまうのである。ただ、蒲室師伯は、先師東陽徳輝の畏敬する禅師で、そ

の文章を我が日本に流布させるのは私の責任である。ところが、春屋が刊行に尽力してくれて、まことに宜しい。ここに深く感謝する次第である。

戊戌（一三五八）秋、日本国利根郡吉祥禅寺、姪円月謹んで書す

これによつて、『参釈』は一三五八年、円月が利根郡吉祥寺（今栃木県利根郡）で、春屋の要請によつて、制作したことが分かる。「法姪」という表現は、円月の師である東陽徳輝と『蒲室集』の著者である笑隠と同門の法の兄弟であるからである。蔭木英雄氏の指摘したように、<sup>①</sup>春屋妙葩の依頼という外的動機によつて執筆したのであるにせよ、大慧派としての使命感から、注釈に精進したのであろう。

ところで、足利蔵の『参釈』の筆跡については、蔭木氏は円月自筆としている。<sup>②</sup>しかし、その筆跡と円月の現存筆跡とを比較すると、書き癖がかなり違つてることが明かである。筆者の見るところ、その筆跡は六冊目の末尾に記されている『蒲室集六冊 円光寺常住 元佶 花押』の筆跡と相似しているように思える。<sup>③</sup>

元佶とは閑室元佶（別号三要、一五四八〜一六一二）のことで、足利学校の第九世座主を務めた江戸初期一流の知識人で、家康の寵愛を受け、木活字十万个を受けて、伏見版を刊行したことは夙に有名である。

また、その手澤本の漢籍六十点余りが国会図書館に、更に三十点が足利学校に所蔵されている。<sup>④</sup>中でも、足利学校には、元佶自筆書き入れのみえる本が多数あり、それらの筆跡と比較すると、『参釈』の筆跡が元佶のだとほぼ確定できる。よつて、現存の『参釈』は、元佶が当時まで伝存していた円月自筆の『参釈』をもとに、自ら所持した五山版に抄写したもの（途中まで）である可能性が大と推測される。円月の自筆ではないが、元佶のような学者がその写本を再写していることは、『参釈』の後世の学者への影響の大きいことを物語つており、それを研究する意味も自ずと増してくるであらう。

## 二 引用漢籍

『参釈』、即ち『蒲室集』に書き込まれている注釈は全巻に及んだものではなく、第一冊巻一から巻四「趙大年小景」詩までの全部の注釈(巻一第一葉から巻四第二葉まで)、及び第二冊と三冊の一部分からなっている。第一冊目の注釈は、円月自らが序の中でも述べているように、笑隠詩中の用語の使用例の列挙(注)の後に、自らの理解(釈)を書き加えるといった体裁をとっている。詩の理解の部分では、笑隠のことを師伯と称し、また予という第一人称で注釈者自身が屢々登場してくる。しかし、これに対して、第二・三冊目の注釈は、詩の理解に関する釈にあたる部分は無く、いくつかの詩作の若干の詩語について、わずかの用例を挙げるにとどまっている。第一巻の途中で注が中断していること、また第二・三冊目の注は用例のみ列挙してあることについて、何らかの事情で円月の『参釈』の忠実な抄写は第一冊の途中で終わっており、第二・三冊に見える一部の注釈は抄写者が抜き書きしたものとして、論者は理解した。従って、この論文では忠実な抄写(脱字などは存するが)と思われる第一巻部分のみを研究対象とする。

## (一) 表

まず、『参釈』で言及している漢籍を、中国の古くからある経史子集の四ジャンル別に以下にリストアップする。

○は、円月の他の作品に書名、同書からの引用、及びその影響が確認されるもの、▲は、現在日本に宋元版が現存しているもの。また、引用数の最も多い書物についてのみ、その数を併記する。

## 經部

五 經 易○▲、尚書○▲、詩經○▲82、周禮▲、禮記○▲、左傳○▲、孝經▲

四 書類 大學○▲

小學類 說文解字○▲、爾雅▲、韻會▲、廣雅、方言▲、集韻▲、釈名

## 史部

正史類 漢書○▲73、後漢書○▲、史記○▲、晉書○▲、新旧両唐書○▲、南史○▲、北史、蜀志、齊書

編年類 通鑑▲

別史類 東觀記、東都事略▲、敬宗實録

傳記類 高士傳、襄陽耆旧傳、汝南先賢傳

地理類 潤州凶經、廬山記▲、三輔黃圖、方輿勝覽▲、廬阜雜記

政書類 通典▲、文獻通考▲、太(大)元政典、大元通制、至元格

目錄類 別録○

間接引用 列女傳(詩経註)、孫氏瑞應畵(太平御覽引)、法顯記(後漢書注引)

## 子部

儒家類 荀子○、孔子家語○、鹽鐵論、太玄経○、文中子○、新序、説苑○

法家類 韓非子

醫家類 本草(本草衍義)▲

類書類 太平御覧○▲、韻府群玉○

小説家類 世説新語○▲、酉陽雜俎、西京雜記○(二条のうち、一条は杜詩注)、述異記、神異経、搜神記○、開元遺事、

歩里客談、列異記、拾遺記(太平御覧卷344引く)、博物志○、齊諧記、青箱雜記、唐逸史(万里集九は鐘馗の故事

を引く、後齊漫録

道家類 莊子○30、老子○、淮南子○、神仙傳、抱朴子

釈家類 高僧傳、圓覺經○、師聖語錄、僧寶傳、原教論○、傳燈錄、法華經、維摩經○、稜(楞)嚴經、禪録、僧

傳、翻訳名義

間接引用 法顯記(後漢書注)

集部 楚辭○▲、文選○▲51

不明 ●右記、

中世禅僧の学問の特徴の一つとして、百科全書的傾向が指摘されている。それにしてもこのように、八十八種類も  
の漢籍から豊富な用例を引用している円月の博学ぶりは、やはり突出したものであると言わなければならない。竺仙  
梵僊が円月を評して「學通内外乃至諸子百家・天文地理・陰陽之說」(学問は内典・外典並びに諸子百家・天文地理・陰陽の説  
まで通曉している。『天柱集』示中巖首座)と称したのも決して溢美の辞でないことが分かる。また、『参釈』以外で確認されな  
い○印以外の書名が多いことは、円月の読書範囲を知る上で、『参釈』が重要な資料であることを物語っている。

紙幅の関係もあって、八十種以上に及ぶ漢籍のすべてにわたって分析できないが、次に、経・史・子の中で重要と  
思われる書物を一種ずつ選んで(詩経、漢書、莊子)、それを中心に詳しく分析してみることにする。

## (二) 經部 詩經を中心に

『参釈』には、經部に分類されうる漢籍で、五經関係のものが七種類、四書一部と小学類(韻書など)七部のあわせて十五種類が見える。その中で、引用回数が最も多いのは詩經である。詩語の注釈であるから、当然と言えるであろう。

日本の禅僧社会で詩經に寄せた関心の痕跡としては、早いもので『普門院藏書目錄』に、毛詩二冊・呂氏詩記五冊(呂祖謙『読詩記』)・毛詩句解三冊・毛詩三冊とあるのが注目される。そして、やや内容のある議論を展開しているのは虎関師鍊で、その次に興味ある見解を抱いているのは義堂周信であると芳賀幸四郎氏は指摘している。円月は時期的にちょうど虎関と義堂の間に位置しており、彼の詩經認識を分析することは、材料の少ない初期五山僧の詩經受容を考える上で、有意義なことであろう。

まず、詩經のどんな詩編から用例を出しているかをみてみよう。

國風 周南 關雎、葛覃、汝墳 召南 甘棠、羔羊、野有死麋

邶風 柏舟、谷風 鄘風 蝮蝥

衛風 淇奥、考槃、氓 王風 君子陽陽、揚之水、大車

齊風 甫田、猗嗟 唐風 椒聊、杕杜

陳風 衡門、東門之池 曹風 候人

幽風 七月、鷓鴣、東山

周頌 清廟、思文、潛

魯頌 泮水、閟宮

商頌 那、長發

小雅 常棣、伐木、天保、湛露、沔水、小旻、小宛、何人斯、蓼莪、四月、北山、大田、瞻彼洛矣、都人士

大雅 棫櫟、生民、鳧鷖、公劉、抑、烝民、瞻卬

次に、これだけ多くの引用は、いかなるテキストによって行われたのかについてみてみる。文中に見えるテキストに関わる表記を見ると、毛詩、毛伝、箋、疏、正義、嚴粲詩緝などがある。

毛詩というのは、詩経を指す。元来、漢代の詩学には毛詩・齊詩・魯詩・韓詩の四派があったためである。但し、毛詩を除いて他の三派の詩説がはやく亡佚してしまつたため、詩経即毛詩と見なされるようになった。箋は鄭玄著『毛詩鄭箋』のことで、疏と正義は、唐孔穎達著『毛詩正義』を指している。箋も疏も所謂古注である。日本に古くからある博士家の毛詩学は主としてこの古注に拠っている。これに対して、『参釈』で引用が最も多い嚴粲『詩緝』というのは新注に属するものである。<sup>8)</sup>『詩緝』三十六卷は宋嚴粲が普明院藏書目録にも名の見える呂祖謙『説詩記』を主として、諸説を取り入れながら、自説を立てたものである。この『詩緝』については、実は円月は外の作品でも言及がある。『華山説』の中で、嚴上人の字、華山(円月がつけたものではない)のいわれについて、次のように述べている。

曰、宋末有儒人、姓嚴、名粲、字華谷、作詩緝、詩家者之流賢尚焉、或取諸此歟

宋末に、姓は嚴、名は粲、字は華谷という儒者がいたと言われている。『詩緝』を作り、詩を勉強するものは皆これを尊んでゐる。或いはこれから字を取つたのだろうか。

このように、円月の他作品で僅かに書を言及しているだけの書籍について、その具体的な受容の様子を示すのが『参釈』である。ここに『参釈』研究の意義の一つがあるであろう。

では、円月の詩経認識はいかほどのものであったのだろうか。「山雲辞」の「南山兮朝隣」一句について次のように注釈している。

曹風詩南山朝隣、毛傳隣升雲也、衛風蟋蟀朝隣于西、毛傳隣升也、嚴粲詩緝曰、曹風傳言隣升雲、彼詩但當為升、此當為升雲、彼詩指曹風也、此指衛蟋蟀詩、今按粲意以蟋蟀朝隣于西之次句云崇朝其雨、故此當為升雲耳、然如毛氏



意、則章云、蝮螭在東、次章朝隋于西、乃知稱隋者、真為蝮螭耳、故傳言隋升也、而不言雲也、亦宜矣、惟彼曹風南山朝、上句既云蕙兮蔚兮、草木翳茂之秋、則知朝隋者、樵子非雲也、是嚴氏駁毛傳亦當矣、若然、則師伯用南山朝隋之句為雲者非歟、曰不也、雖借用南山朝隋語、然其意非曹風樵子之升也、能解詩者、不可膠乎言語也、(後略)

曹風詩にある「南山朝隋」の語句について、毛伝では「隋」は「昇る雲」とし、衛風「蝮螭」にある「朝隋于西」の語句について、毛伝では「隋」は「昇る」とする。嚴粲『詩緝』では、曹風の毛伝では「隋」を「昇る雲」の意味とするが、彼の詩では「昇」とすべきで、この詩でこそ「昇る雲」と解すべきだとしている。彼の詩とは曹風の詩を指し、「此」は衛風の蝮螭という詩を指す。今、思うに、嚴粲は、蝮螭の「朝隋于西」(朝隋は西に)の次の一句が「崇朝其雨」となっているため、「昇る雲」の意味とすべきであると考えた。ただ、毛伝の理解だと、この段落では、「蝮螭在東」(蝮螭東に在り)といひ、次の段落で「朝隋在西」(朝西に隋る)と言っているから、「隋る」といっているのは、実は蝮螭だということになる。毛伝で「隋」を昇るとして、雲と言わないのはこのためである。(この理解もまた宜しい。惟、曹風「南山朝隋」の上の句は「蕙兮蔚兮、草木翳茂之秋」と言っている以上、朝隋というのは、樵子であり、雲でないことが分かる。ここで嚴氏が毛伝を批判するのも妥当である。それならば、笑隱が「南山朝隋」の句を用い、雲を表現するのは間違いか、いや、間違いではない。「南山朝隋」という語を借用しているけれど、其の意味は曹風の「樵子が昇る」という意味ではない。本当に詩の分かる者は、字句にこだわってはいけぬ。

要約すると、詩経では、曹風(正しくは鄘風「候人」と衛風「蝮螭」)に「朝隋」という言い方が二ヶ所見える。その意味については、毛伝と『詩緝』では正反対に解釈している。これに対して、円月は衛風の隋に対する解釈はそれぞれ一理あるとするが、曹風の隋についての解釈は嚴氏のほうが妥当としている。このように、円月の詩経理解は中国の注釈書を読み合わせ、それぞれの解釈の当否を論じる力があるほど、高度なものであった。<sup>10)</sup> しかも、新注のほうをより重要視

すると同時に、古注をも廃さない新旧折衷的なものであったようである。

中世、特に初期における禅僧の学問の歴史的役割の一つとして、新注採用の契機を作ったことが挙げられる(彼らの研究そのものは系統立ったものに到達していないという指摘もなされているが、先駆的な紹介者としてやむを得ない一面もあると思われる)。嚴粲の『詩緝』について言うと、後代清原宣賢の『毛詩抄』でも、新注書の一つとして参照している。その先蹤として、円月の『詩緝』受容を評価する必要があるだろう。

### (三) 史部 漢書を中心に

中世禅僧は中国歴史に対する関心が非常に高かった。その理由には、師資相伝を重視する禅宗の性格上、歴史に対する関心が高とも高いこと、宋元の中国は歴史精神の昂揚横溢した時代であり、渡来僧や留学僧によって、この傾向が導入されたと思われること、そして、何よりも知識充足の要求からも、史書の勉強が不可欠だったことが挙げられる。『参釈』に見える史部漢籍名は中世の禅僧がどんな書籍に基づいて、中国の歴史に関する知識を得ていたかを見るのに重要であろう。

各類のうち、引用回数も種類も正史類が共に一番多い。正史類に続いて多いのは地理類と政書類である。外国の文化を理解する上で、地理的知識は興味深く、難しいことの一つである。禅僧亀泉集證の選択で『方輿勝覧』が東山山莊東求堂の書院に飾られた話は余りにも有名である。また、こうした専門的な地理書と同時に、史記や漢書などの正史類も地理的知識の土台となっている。後で列举する漢書の引用箇所には地理志からの引用が見えるのもその裏付けとなる。

政書類からの引用が、特に、『至元格』や『大元通制』などの当時現行の政書から見られるのは注目すべきことである。現在のところ、他の禅僧の記録でも、円月の他作品でも、上記三書についての記述はみられない。しかし、長期

間に渡って中国で生活し、江南の機織り娘に同情を寄せるような社会詩を書いたような人物である円月が現行の法典・法律書に接触し、興味を持つ機会があつても不思議ではない。『参釈』におけるこの記述は円月の現実社会に対する関心を示す一例ともなろう。

次に、史書の中で、引用回数のもっとも多い漢書についてみてみよう。円月と漢書については、「中巖その他の博学広才も漢書までは手が届かなかつたのであろうか」とするのが芳賀氏の意見である。確かに、円月の他の作品を見る限りでは、漢書に興味を示す痕跡は少ない。とはいへ、「茂林説」で「西漢志云、豊茂於戊」とはつきり言及している<sup>13</sup>。さらに、『参釈』に見える漢書からの大量引用は、円月が漢書に相当関心を持っていたことを物語る。では、七十三ヶ所に及ぶ漢書引用は主としてどんな巻からなされたのであろうか。

#### 紀 高帝紀、宣帝紀

#### 表 百官表(鴻臚典客)、功臣表(封爵之誓)

#### 志 五行志、郊祀志、禮樂志、食貨志、地理志

#### 列傳 項籍傳(卷三十一)、張耳傳(卷三十二)、劉章傳(卷三十八 傳第八)、曹參傳(卷三十九)、叔孫通傳(卷四十三)、賈誼傳

(卷四十八)、司馬相如傳(卷五十七下)、蘇建、子武傳(卷五十四)、嚴助傳(卷六十四上)、王褒傳(卷六十四下)、東方朔傳(卷六十五)、于定國傳(卷七十二)、疏廣兄子受(卷七十二)、張壹傳(卷八十下)、揚雄傳(卷八十七下)、王氏傳(卷八十八)、申公傳(卷八十八)、淮陰侯列傳(卷九十二)、原涉傳(卷九十二游俠傳)、石顯傳(卷九十三)、匈奴傳(卷九十四上)、西域傳(卷九十六下)、王莽傳(九十九上)

間接引用 文 選 西都賦注、函谷

劉孝標辯命論注、主父偃

江文通詣建平王上書注、鄭子真

魏都賦注、楊惲

藝文類聚

卷三十三報恩、張蒼

卷三十五貧、朱買臣・魏勃

卷九十八芝房之歌

このように、漢書からの引用は主として伝記部分に集中していることが分かる(間接引用部分の多くもそうである)。また、この傾向は後漢書や史記など他の正史引用にも共通してみえる。故事典故に通ずることがやはり歴史書勉強の主な関心の所在のひとつであることを窺わせる。この傾向は後代の禅僧の間でも引き継がれており、列伝部分の抄物が単独で行われることに至るのである。

なお、漢書所拠のテキストをみると、詩経や莊子(後述)のように、いくつもの注釈本を参照した形跡はなく、もっぱら顔師古注によったようである。<sup>19)</sup>

(四) 子部 『莊子』を中心に

諸子百家の作品を指す子部類書籍は、円月の教養の広さを一番如実に物語っている。『太平御覧』のような類書から間接引用する例も認められるが、基本的には原典からの引用が主と思われる。『青箱雜記』、『歩里客談』など、円月の他の作品だけではなく、一般的に知られている五山禅僧の読書圏、また日本現存宋・元版に見出されない書名が少なくない。当時の禅僧の読書圏ないしは日本に伝わっている漢籍は現在知られるものよりも、もっと広汎なものであつた。

たことを窺わせている。

子部の中で引用回数が最も多いのは『莊子』である。老莊思想と禪思想は、中国大陸で既に古くから互いに影響しあひ、融合しただけに、日本でも禪僧の間で老莊思想への関心が昂揚していた。とりわけ、『莊子』に対する関心は絶大なものがあつたらしく、虎関師鍊、雪村友梅、夢窓疎石、義堂周信、横川景三、桃源瑞仙など、多くの高僧が『莊子』に関心を示す痕跡が確認される。円月自身も「道物論」と「鯤鵬論」を作つたり、莊子の文章に讚美の辞を捧げたりして、最も莊子をよく理解し、それに共鳴したものの一人とされている。『參釈』における三十ヶ所に及ぶ『莊子』からの引用はまさに莊子理解者としての円月像を裏づけるものであらう。そして、更に重要なのは、『參釈』によつて、円月が何人の注で『莊子』を読んだかが分かることである。本文と一緒に、注疏をも引用しているからである。

その内容を検討すると、円月は『莊子』の引用に当たつて郭象注、成玄英疏、陸徳明音義、林希逸注の四種のテキストを参照していたことが分かる。一例ずつ以下に示す。

①「次韻張夢臣侍御遊蔣山五十韻」詩中「御風」一句についての注(卷三第二葉)

『莊』逍遙遊「夫列子御風而行、泠泠然善也。旬有五日而後反、彼於致福者、未數數然也。此雖免乎行、猶有所待者也。注、郭曰、非風則不得行、斯必有待也。

郭曰とあるのは、郭象注を指すと思われ、実際部分は郭象注の該当部分と完全に一致する。

②「次韻張夢臣侍御遊蔣山五十韻」詩中「斷壘」についての注釈(卷三第二葉)

『莊』徐無鬼「莊子送葬、過惠子之墓、顧謂從者曰、郢人墜漫其鼻端若蠅翼、使匠石斲之。匠石運斤成風、聽而斲之、盡聖而鼻不傷、郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、嘗試為寡人為之。匠石曰、臣則嘗能斲之。雖然、臣之質死久矣。自夫子之死也、吾無以為質矣、吾無與言之矣。」疏、聖者、白善土也。

浪線部分は成玄英疏注の該当部分と完全に一致する。

③「駿馬図」詩中「世無伯樂久矣」についての注釈(卷二第二葉)

『莊』馬蹄『釈文』、伯樂、音洛、姓孫、名陽、善馭馬、石氏星經云、伯樂、星名、主典天馬、孫陽善馭、故以為名。  
『釈文』とは陸徳明の『經典釈文』のことと思われ、浪線部分は『經典釈文』卷二六〇二八に当たる『莊子音義』の相当部分とほぼ一致する。

④「述懐送觀空海帰臨川七十韻」詩中の孤注という一語の註釈(卷三第五葉)

『莊』達生「以瓦注者巧」。林希逸口義曰、注、射也、射而賭物曰注。寇萊公勸真宗澶淵之役、王欽若敬(嫉)之、曰、  
「寇準以陛下為孤注也」。

林希逸口義とは林希逸著『莊子虞齋口義』のことで、浪線部分は同書の該部分と完全に一致する。

①の郭注は鎌倉時代の書写にかかる写本が高山寺に蔵されているため、鎌倉時代から既に行われたことが分かる。

②成玄英疏は郭注とともに、『日本国見在書目録』に著録されているだけでなく、宋末刊本の郭注と合冊の『南華真經注疏』残本五巻が現存することから、郭注と同じく、時おり郭注と対になって、比較的早い時期から行われたと推測される。③の『經典釈文』については、『大日本古文书』卷三天平二十年の条に名前が見えるのははじめ、かの有名な藤原頼長の読破した書目に入っているから、これも前代から行われていたことが分かる。このように、郭注、玄疏と音義が『参釈』に見えることは、鎌倉時代に引き続き室町時代に入っても、三書は行われ続けたことを物語っている。

一方で、四書の中で最も注目すべきものは林注口義である。程頤の学問の系譜を引く林希逸の撰した『莊子口義』は道儒仏三教一致の立場に立っており、その伝来と受容は日本莊子学上非常に重要な出来事である。先学の研究によると、惟肖得巖(二三六〇〜一四三七)は日本で初めて『口義』を読んだ人で、その後、林注は次第に普及し江戸時代中期に荻生徂徠が郭象注を再び重視するまで、他注を圧倒して莊子理解の最も重要な拠り所となったことが指摘されている。惟肖得巖と比べて、円月の一三五八年著の『参釈』の方が時期的に早いことはいまでもない。惟肖得巖の講釈は『口義』

の普及に大きな役割を果たしたことは間違いないが、日本で初めて『口義』を読んだ人という名誉は、やはり先輩の円月に与えるべきであろう。

引用漢籍の中で、集部に入る書物は僅か文選、楚辭二種というのは誠に奇妙なことである。実は、これは集に入るべき文章や漢詩を引用する際、書名の代わりに、作者名で挙げているからである。次に、引用漢詩(文章を含めて)について、整理してみる。

### 三 引用漢詩

様々な漢籍と並んで、『参釈』では、数多くの漢詩用語例として引いてある。やや煩雑すぎる嫌いはあるが、いかなる詩人のどんな詩文を引用しているか、時代別に整理してみよう。実際の引用は詩人名と詩句の形式で成されているものが多いが、ここでは詩人名と詩題の形で整理する。詩(文)題の判明しないものについてのみ、引用箇所を記す。なお、詩題の前に◎のついているものは、『参釈』においても、題名が明記されているもの、(選)は文選に収録されているもの。●は判読不可能の箇所である。

#### (一) 表

唐以前

詩人	詩(文)題	詩人	詩題
江淹	擬淵明詩(選)、古離別(選) 擬休上人詩(選)	陶淵明	「試携子姪輩、披榛步荒墟」 ◎ 販去來辭序(選)、雜詩(選)

陸機	赴洛道中作二首(選)	郭璞	遊仙詩(選)
張平子	四愁詩(選)	潘安	金谷集作詩(選)
孫子荆	征西官屬送於陟陽侯作詩(選)	鮑明遠	擬古三首(選)、苦熱行○
劉休玄	○擬古二首擬行行重行行(選) 擬明月何皎皎(選)	謝宣遠	於安城答靈運(選) 王撫軍庾西陽集別作詩(選)
謝玄暉	始出尚書省(選) 謝玄暉暫使下都夜發新林至京邑 贈西府同僚(選)	張景陽	雜詩十首(選)
殷仲文	南州桓公九井作(選)	魏武帝	短歌行(選)
沈約	三月三日率爾成篇(選)	陸士衡	招隱詩(選)
顏延年	五君詠五首(選)	劉安	招隱士(選)
吳均	◎別王謙詩	左思	別兄詩(選)
文任彥昇	奏彈劉整(選)	孔明太子	「南箕不可欺」(選)
賦向子期	思舊賦(選)	◎招隱詩	
顏延年	◎赭白馬賦(選)	孔德璋	北山移文(選)
宋玉	神女賦(選)	張平子	思玄賦(選)、東都賦(選)
班固	東都賦(選)、西都賦(選)	司馬相如	南都賦(選)、西京賦(選)
左思	吳都賦(選)、魏都賦(選) 蜀都賦(選)	孫綽	子虛賦(選)、上林賦(選) 天台賦(選)



唐詩(文)

杜甫(88)

◎佳人

江漢

琴臺

北征

壯遊

歲暮

遣懷

歸來

南鄰

天河

草閣

空囊

劍門

麗人行

青陽峽

鐵堂峽

◎法鏡寺

兵車行

無家別

◎鳳凰

玉腕驪

◎丹青引

鹿頭山

驄馬行

別蘇徯

月三首

洗兵馬

觀打魚歌

東屯月夜

樂遊園歌

徒步歸行

絕句四首

魏將軍歌

遣興三首(其一)

◎別贊上人

◎寄贊上人

曲江二首

春日憶李白

◎丈人山詩

◎招魂彭衙行

◎天育驃騎歌

上水遣懷

贈韋左丞丈

春日江村五首

大覺高僧蘭若

偃仄行贈畢曜

登舟將適漢陽

懷錦水居止二首

千秋節有感二首

題玄武禪師屋壁

送王信州峯北歸

飲中八仙歌奉贈蕭二十使君

贈李八秘書別三十韻

◎丹青引贈曹將軍霸

奉贈太常張卿二十韻

病後遇王倚欽贈歌

寄岳州賈司馬六丈巴州

蘇端薛復筵簡薛華醉歌

戲為六絕句十七夜

◎戲為雙松圖歌(韋儂畫)對月

不見(原注:近無李白消息)

送長孫九侍御赴武威判官

劉九法曹鄭瑕丘石門宴集

◎冬日洛城北謁玄元皇帝廟

八哀詩(故右僕射相國張公九齡)

題衡山縣文宣王廟新學堂呈陸宰

送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白

◎大雲寺贊公房四首

上韋左相二十韻(見素)

奉和嚴中丞西城晚眺十韻秦州雜詩二十首

奉和賈至舍人早朝大明宮

茅屋為秋風所破歌

奉先劉少府新畫山水障歌

送韋十六評事充同谷郡防禦判官

秋日荆南述懷三十韻

承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首(其の十)

大曆三年春白帝城放船出瞿塘峽久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻

嚴八使君兩閣老五十韻奉贈韋左丞丈二十二韻

夜聽許十損誦詩愛而有作

聶耒陽以僕阻水書致酒肉療飢荒江詩得代懷興盡本韻至縣呈縣令陸路去方田驛四十里舟行一日時屬江漲泊於方田

不明 二柱●中流

李白(17)

春怨 古風

◎蜀道難

行路難

◎長干行

戰城南

◎詠桂詩

前橘州詩 望月有懷

贈崔諮議

◎鳳凰臺詩

望廬山瀑布

◎對酒憶賀監

憶東山二首(-)

廬山謠寄盧侍御虛舟

◎与韓荊州書(文)

不明 「飛花舞風入簷前」

●●水詩二首

秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻

◎戲作俳諧體遣悶二首

自京赴奉先縣詠懷五百字

寄李十二白二十韻

暮春江陵送馬大卿公恩命追赴闕下

贈特進汝陽王二十韻

奉酬薛十二丈判官見贈

渝州候嚴六侍御不到先下峽

韓愈(25)			
薦士 調張籍 ①南山詩 符讀書城南 芍藥歌 答張徹 ②剥啄行			
◎聖德詩 醉留東野 ③會合聯句 ④納涼聯句 ⑤陸渾山火和皇甫湜用其韻			
送僧澄觀 寄盧仝 北極贈李觀寄崔二十六立之 遊青龍寺贈崔大(一作群)補闕			
聽穎師彈琴赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士			
文 鰐魚文、与孟簡書、送李愿飯盤谷序、祭柳文、送廖道士序、黃陵廟碑、進學解琴操			
不明 「張籍不幸兩目不見物、無用於天下、取人當問其賢不賢、不當計其与不盲也、當今盲於心者皆是、若籍独盲於目、而其心則能別是非」			
不明 「技閑置散乃分之宜」			
不明 「業精於勤、荒於嬉」			
柳宗元	遊石角過小嶺至長烏村、捕蛇者說(文)、(不明)「風馬雲車、肅焉徘徊」		
白楽天	夢微之(十二年八月二十日夜)、琵琶行(文)、五亭記(文)		
王維	奉和聖製春春送朝集使歸郡應制 渭城曲	杜牧	◎題魏文正詩 郡齋獨酌
劉禹錫	石頭城 元和十一年自朗州召至京戲贈看花諸君子	陸龜蒙	開元雜題七首 舞馬
賈嶋	下第	韓湘	言志
岑參	奉和中書舍人賈至早朝大明宮	孟遲	懷鄭洎
薛能	杏花	李賀	馬詩二十三首其の十八

李群玉	◎黄陵廟詩	李洞	送雲脚上人遊安南
劉言史	贈成鍊師四首	盧仝	◎月蝕詩
劉斌	和許給事傷牛尚書	皇甫湜	祭柳子文(文)
(嚴維)	丹陽送韋參軍	(李商隱)	籌筆驛 唐人詩とある
		不明	「門前有个長松」

宋詩

蘇軾(26)

和陶擬古九首其一、其四

贈李道士

菩提寺南漪堂杜鵑花再用前韻

次韻王鞏獨眠

次韻王忠玉游虎丘絕句三首其一

狄詠石屏

次韻定慧欽長老見寄八首其二

書破琴詩後

◎章質夫送酒六壺、書至而酒不達、戲作小詩問之

雨后行菜圃

答范淳甫次韻答王定國

孔長源挽詞二首其一

過子忽出新意、以山芋作玉糝羹、色香味皆奇絕、

李公擇白石山房

天上酥陀則不可知、人間決無此味也

王鞏清虛堂入峽

予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、

閻立本《職貢圖》

死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、

留題延生觀後山上小堂

以遺子由、二首其二

題孫思邈真

慶源宣義王文、以累舉得官、為洪雅主簿、雅州戶

寄蘄簞與蒲傳正

蘇子由	◎巫山廣詩	楊誠齋	◎過雪川大溪詩、◎奔牛閘詩
陳簡齋	墨梅詩	陳后山	◎贈二蘇公
王安石	不明「方諸承月調幻葉、灑落生綃變寒暑」 「霜筠雪竹鍾山寺」	朱熹	不明「羅浮山下黃茆村」 「進執事於臺端之重」
送顧子敦赴河東三首(之二)	次韻楊君全送春花 有懷半山老人再次韻二首(之一)	次韻楊明叔見餞十首(之十并序)	◎(謝黃從善司業寄)惠山泉詩
黃山谷(15)	次韻張仲謀過酺池寺齋 寄裴仲謨 戲和于寺丞乞王醇老米	王文恭公挽詞二首(之二) 弈棋二首呈任公漸(之二) 贛上食蓮有感	欵乃歌二章戲王稚川(之二)
掾、遇吏民如家人、人安樂之、既謝事、居眉之青 神瑞草橋、放懷自得、有書來求紅帶、既以遺之、 且作詩為戲、請黃魯直、秦少游、各為賦一首 回先生過湖州東林沈氏、飲醉、以石榴皮書其家東 老菴之壁云、〃西鄰已富憂不足、東老雖貧樂 有餘、白酒釀來因好客、黃金散盡為收書、〃西 蜀和仲、聞而次其韻三首、東老沈氏之老自謂也 湖人因以名之、其子偕作詩、有可觀者其二	次韻致政張朝奉仍招晚飲 記所見開元寺吳道子畫佛滅度、以 答子由題畫文殊普賢 王晉卿作《煙江疊嶂圖》、僕賦詩 十四韻、晉卿和之、語特奇麗、因 復次韻、不獨紀其詩畫之美、亦為 道其出處契闊之故、而終之以不 忘在莒之戒、亦朋友忠愛之義也	次韻楊明叔見餞十首(之十并序)	

元

物初和尚	不明「埧篋播清響」
虞集(虞伯生)	行道記(文)、竜翔寺碑(文)、御史臺記(文)

不明 張子湖『徐韓彦直淮東提挙制』

郭秦穢 良工康刀●文

右表から分かるように、あわせて六十四人の詩人の二〇〇以上の詩文が引用されており、漢詩に対する円月の造詣の深さを物語っている。唐以前の詩人はすべて文選に収められているもので、中世になっても、文選は引き続き重要視されていることがここからも確認できる。唐詩では杜甫、李白、韓愈の三者、宋詩では蘇軾と黄庭堅が多いのは、当時の漢詩受容の基本的風潮と一致している。また、当代(元)詩人として、円月の派祖にあたる物初和尚と並んで、虞集(伯生)の名前が見えている。もちろん笑隱が虞集の表現を踏まえているからではなく、虞集が笑隱の行道記を撰したため、笑隱の行跡を説明する際に引用したり、当代関係の事物の説明に引いたりしている。虞集の名及びその文集が日本に知られるようになったのは、不聞契聞や別源円旨ら古林の会下に列した禅僧によってであると芳賀氏は推測しているが、大慧派の立場から、円月もまた虞集紹介者の一人として教えられるのではなからうか。

## (二) 最も多く引用されている杜詩

次に、引用が圧倒的に多い杜甫詩について、分析してみよう。中国文壇における尊杜風潮の影響を受け、中世禅林では、平安時代に貴族社会で人気の高かった白居易に変わって、杜甫詩は高い評価を受け、大いに行われた。その様子については、既に芳賀氏や朝倉尚氏の詳しい研究があり、円月についても言及が見られる。ただし、両氏は共に杜

甫に関心のある初期禅僧の一人として円月を紹介するにすぎず、彼にもましてその学芸上の弟子に当たる義堂周信の方が杜甫を高く評価したとしている。この評価については少し考え直す必要があるように思われる。確かに引用回数が多い理由としては、笑隱の詩に杜甫の詩を踏まえている部分が多いこと、円月の手元に杜詩集があることなども考えられる<sup>②</sup>。そうした物的要因を考慮しても、六十人以上の詩人の中で、杜詩がその半分近くを占める九十六首という数字は、やはり注釈者円月の杜詩に対する傾倒ぶりを窺わせるものであろう。実際、『参釈』には、おびただしい杜詩の引用の間に、杜甫に対する円月の評価も散在している。代表的なものを二ヶ所ほど以下に引用する。

まずは、一首目「猗蘭辞」で、なぜ孔子の作である琴操を引用しないかわりに、杜甫の詩を例に出しているのかという人の詰問に対して、円月は次のように答えている。

對言、吾未之信、夫琴操作者果為誰耶、惟韓文有之、今以老杜視退之猶子孫耳、(中略)老杜下筆如有神、可謂集而大盛者也、退之不可及也

(私は)次のように答えた。「私はそれを信じていない。『琴操』の作者は果たしてだれであろうか。(孔子だというのは)韓愈の文章にあるだけだ。杜甫と韓愈を比べたら、韓愈は子孫のようなものだ。(中略)杜甫は筆を下ろすと、神業のような文章を書く、正に集大成者であり、韓愈は彼に及ばない」。

このように、韓愈よりも杜甫のほうがはるかに優れているとする。しかも、その理由については、杜甫自身の言葉を引いて、文章(詩)のすばらしいことに求めている。ちなみに、韓愈に対する円月の評価は、多くの用例を引いていることから分かるように、決して低いものではない<sup>③</sup>。杜甫の偉大さを強調するために、韓愈を引き合いに出しているのであろう。

もう一つ挙げよう。「初發金陵夜泊龍灣寄茅山道士李方外」詩「人生不必行万里」句についての注釈で(巻二第四葉、次)のようなことを引いている。「古人云、不行一万里、不讀万卷書、不可以觀杜詩」(昔の人は言った。一万里を歩いて、一

巻の本を読んでからでないといふと、杜詩を読んではいけない。

このように、円月の杜甫評価を見ると、円月こそ中世禅林で杜甫を絶賛し、崇拜した最初の人物と言えよう。<sup>23)</sup>次に、杜詩の引用はどんなテキストに基づいているかを見てみよう。

杜詩といえば、たくさんの刊本や注釈本がある。日本に現存する宋元版だけでも、『新刊校定集注杜詩』（残本）、『集千家註分類杜工部詩二十五卷』、『杜工部草堂詩箋四十卷・杜工部草堂詩年譜二卷』、『集千家註批點杜工部詩』の四種類がある。<sup>24)</sup>では、円月が参考にしていたものはこの中にあるだろうか。『参釈』における杜詩の引用で、詩句と一緒に注を引用している箇所が十五ほどある。それを現存諸本と照合してみると、現存点数の最も多い『集千家註分類杜工部詩二十五卷』徐居仁編、黄鶴補注、五点、以下『集千家註』と略すの該当箇所とほぼ完全に一致していることが分かる。二例ほどを以下に挙げてみよう。『集千家註』からの引用は註の部分のみとし、( )内文字は『参釈』にない文字である。

『参釈』

①『送許典史』冒頭二句注(巻二、九葉)

杜丈人山詩、自為青城客、不唾青城地。

注、青城山在漢中郡。唾地者、有所惡而唾也。

所不唾其地、所以敬之也。

『集千家註』

卷十三、「丈人山詩」

青城山在漢中郡。(趙曰)唾地

者、有所惡而唾也。不唾其地、所以

敬之也。

②『送鑑文美知事赴燕南』「初扈蹕」句注(巻四一葉)

杜詩「扈蹕上元初」。扈、從也。蹕、鳴蹕也。天子

之出、鳴蹕以清道。

「贈李八秘書別三十韻」

(趙曰)扈、從也。蹕、鳴蹕也。

天子之出、鳴蹕以清道。



以上の例から分かるように、注者の名前を省略したりするような細部の違いはあるが、杜甫の詩の引用にあたって、円月は『集千家註分類杜工部詩二十五卷』を利用したと断定してよいであろう。ちなみに、この注釈本は宋代分類本系統のなかで、最高峰とされるものである<sup>(2)</sup>。それを利用してことから、禅僧が中国文化の輸入と受容の最先端を走っていたことが分かる。

### おわりに

史跡足利学校所蔵の『挿注参釈広智禅師蒲室集』は中蔵円月が春屋和尚の要請に依えて、五山版の『蒲室集』の余白部分に漢文で詳細な注釈を書き込んだもので、現存のものは足利学校九代座主三要元佑の写本と思われる。『参釈』制作に当たって、円月は八十八種にのぼる漢籍と二〇〇以上の漢詩(文から引用をしており、その博学ぶりを窺わせている。その一部分の漢籍は、『参釈』でのみ確認されるものもあり、円月の読書範囲だけではなく、十四世紀当時の漢籍輸入問題を考えるうえで、重要な記述となる。また、漢籍を経・史・子別に整理し、各分野の代表的な漢籍及び漢詩で最も多く引用されている杜詩について詳しく分析すると、円月は従来言われている以上に、時代を先取りする人物であることが分かる。惟肖得巖が始めて読んだとされていた新注系の『莊子虞齋口義』を、実は円月が既に読破していたことはその象徴的な一例であろう。小論では『参釈』の引用文献をいくつか紹介するにとどめたが、引用文献名が確定できないものを含め、他の類似の注釈書との比較など、未解決の問題が多く残っている。『参釈』の内容について、今後さらに多角的な見地から研究を続けたいと思う。

### 注

(1) 『中世禅者の軌跡 中蔵円月』(蔭木英雄、法蔵館、一九八七)二二二頁。

- (2) 注(1)前掲書二二二頁。
- (3) 足利藏『挿注参釈広智禅師蒲室集』の筆跡について、コピーを持って、根津美術館の菅原先生に鑑定をお願いしたところ、恐らく円月筆ではなく、巻末の「円光寺住持元佑」の署名と同一人物だろうということだった。
- (4) 国会図書館所蔵元佑手澤本については、宇津純「京都円光寺旧蔵 閑室元佑手澤本目録」(参考書誌研究、第三十号)、また足利学校遺跡図書館に伝存する手澤本については、川瀬一馬「増補新訂足利学校の研究」(昭和四九年)第二章を参照されたい。
- (5) 『参釈』には後代の人が勉強した際に入れたと思われる朱筆が見られる。語釈(参)には●をつけているのに対して、解説部分(釈)には▲と記号をつけ分けている。
- (6) 『中世禅林の学問および文学に関する研究』(芳賀幸四郎、思文閣、一九八一)九四頁。
- (7) 『参釈』以外の作品で、円月は自らの詩作に詩経の表現を踏まえる作品が十首ほど確認される。嚴註からの引用は合わせて十三ヶ所が確認されている。また、箋と出ている部分でも、実際は嚴註から引用している例もみられる。例えば、「會曹伯珪」詩の「鄂」字についての注釈では、以下のように書かれている。
- 『詩』「常棣之華、鄂不韡韡。鄂即萼、韡音偉。箋、承華者曰萼(後略)
- 浪線の箇所を實際引いてみると、鄭箋にはないかわりに、「詩緝」では「箋曰、承華者曰萼」という記述が見つかった。
- (9) 『五山文学新集』第四卷「中巖円月集」六七二頁(東京大学出版会、一九七〇)
- (10) 一字の解釈をめぐる、違う意味の用例を出して、妥当なものを取る作業はほかにも多々みられる。例えば、一首目「猗蘭辞」の「猗」字、「佛智師帰仰山」詩「扶輿」についての解釈などがある。猶、「扶輿」に関しては、『文明軒雑談』三九〇条にも関連記述が見える。
- (11) 『参釈』にある『至元格』からの引用は、現在『通制條格』『元典章』から彙輯した『至元新格』には含まれていない。
- (12) 芳賀幸四郎前掲書一七一頁。
- (13) 『五山文学新集』第四卷、六五九頁。なお、円月が引用している部分は『漢書』卷二十一上律曆志にある。
- (14) 『漢書』引用に際して、師古曰と並んで、「蘇林曰」、「應劭曰」の形で注釈者の名前が見えるが、何れも顔注に引用してある

ものである。

- (15) 詳しくは『中世禅林の学問および文学に関する研究』（芳賀幸四郎、思文閣、一九八一—一九九〇二頁を参照）。
- (16) 『参釈』に見える『庄子』の引用は応帝王、山木、達生、大宗師、徐無鬼、斉物論、秋水、逍遙遊、田子方、則陽篇、養生主、盜跖、天道、説劍、天地、馬蹄の各篇からである。
- (17) 『大日本古文书』三（帝国大学、明治三十五年十月）八九頁。
- (18) 藤原頼長『臺記』康治二年九月二十九日条。
- (19) 『林希逸庄子口義在日本』池田知久、『庄子虞齋口義校注』（周啓成、中華書局、一九九七）所収。
- (20) 芳賀幸四郎前掲書二六九頁、及び朝倉尚『禅林における杜甫像寸見—文章一小技と杜甫忠心』（岡山大学教養部紀要、一九七五）を参照。
- (21) 笑隠詩をはじめ、当代中国文人の杜甫崇拜はそのまま日本禅僧の杜甫への関心を高めたことになったであろう。
- (22) 韓愈の排仏思想を批判しながらも、彼の文章を高く評価することは『文明軒雑談』の次の一条によってもうかがえる。「呂中云、唐文至韓愈而古、本朝文至歐陽子而古、謂歐陽子、今之韓愈、非溢美矣」（呂中が云うには、唐の文章は韓愈に至って古文になる。我が宋朝の文章は歐陽修に至って古文になる。歐陽修を当世の韓愈と称するのは溢美の辞ではない）『五山文学新集』第四卷、四七四頁。
- (23) 円月が杜甫に傾倒する理由としては、その文章のすばらしいことだけでなく、円月自身もそうであるように、常に国を憂い、民を憂う杜甫の政治参加的な生き方にもあると思われる。円月と杜甫の共通性については、高文漢氏の『五山文筆僧中蔵円月の世界』（『日本研究』一八、国際日本文化研究センター、一九九八）に言及がある。
- (24) 『宋元版の研究』長澤規矩也、汲古書院、一九八三
- (25) 『杜甫論の新構想—受容史の視座から』許総著、研文出版、一九九六
- (26) 『蒲室集』詩文部分についての抄物は、龍谷大学蔵『蒲室文集綬緒』がある。